

こうして、西郷は表舞台に帰ってくる。38歳(1864年)の時である。

彼は、復帰すると直ちに薩摩藩の軍事総司令官ともいえる軍賦役に任ぜられている。

その後、禁門の変(蛤御門の変)に始まり、  
長州討伐、単身による長州との講和折衝、  
坂本の斡旋による薩長連合、薩土盟約、  
鳥羽伏見の戦い、江戸城無血開城、  
と明治維新に至る革命へのエネルギーをひとまとめにする大立役を演じ、  
1868年(明治元年)の維新まで突っ走ることになるのである。

この4年間、西郷は後方に控えて指揮を執る、  
というより革命の実践的指導者として陣頭に立っている。

その最も躍動的であった時期、交流のあった著名人達の目に映る  
西郷の印象は、どんなものだったであろう。

勝の紹介により西郷と対面した坂本竜馬は、こう評した。

「西郷という人物は、小さく叩けば小さく響き、  
大きく叩けば大きく響く、釣鐘のような男だ。  
もし、馬鹿なら大きな馬鹿で、  
利口なら途方もなく大きな利口だろう。」

薩長連合秘密軍事同盟の中に入った、  
やはり土佐勤王の志士中岡慎太郎は  
その著者「時勢論」の中で西郷のことをこう書いている。

「西郷は学識がある、胆略あり、  
常に寡言にして最も思慮深く、雄断に長じ、  
偶々に一言を出せば確然人の肺腑を貫く、  
かつ、徳高くして人を服し、  
しばしば艱難を経て事に老練す」

勝海舟は「氷川清話」の中で

江戸城無血開城時の西郷の印象を、次のように語っている。

「...西郷に及ぶことのできないのは、  
その大胆識、大誠意とにあるのだ。

俺の一言を信じて、  
たった一人で江戸城に乗り込む。

俺だってことに処して、多少の権謀を用いないこともないが、  
西郷の至誠は俺をして、あい欺くことが出来なかった。

ときに際して小籌浅略を事とするのは、  
かえってこの人の為に腑を見透かされるばかり、  
と俺も至誠をもってこれに応じたのさ。

この時、俺が感心したのは、  
西郷が俺に対して、幕府の重臣たるだけの敬礼を失わず、  
談判の時も、始終坐を正して手を膝の上に載せ、  
少しも戦勝の威光でもって敗軍の将を軽蔑するというような  
風が見えなかったことだ。

その胆量の大きいことは、いわゆる天空海闊で、  
見識ぶるなどということは、もとより少しもなかった……」